

言語学と言語学者

田 中 克 彦

一橋論叢の編集委員会から、本誌の四月号を新入生向けの特集号とするというので、それにふさわしい一篇を寄せるよう、私に求めてきた。そこで私は言語学にかかわる分野から話題を選ぶことにするが、そうなると、それは何か特殊な問題を設けた専門の学術論文であってはこの号の目的にふさわしくなく、といって、教科書的な入門の手引きを企てることはさらにふさわしくないだけでなく、実行不可能である。とすれば、なぜ言語学は教科書になりにくいかを間接的に示唆することによって、言語学の性格の一端にふれ、次いで、このような学問にたずさわる研究主体と、現実の歴史的状況との関係をいくつかの例について考えてみることにした。しかし時間の制約のために、ことが十分に及ばないとおそれるが、

そこはかえって読者の想像力をかきたてる自由な空間となろう。

他の学問分野についても同様なことが言おうとすれば言えるであろうが、言語学についてはとりわけ、一種類の、あるいは一冊の教科書だけで一つの科学の全貌を集約するのにふさわしくないと、力をおこめて言いたくなる。だからこそ、あれほど多くの概論書があらわれているにもかかわらず、かたよらない、集約的な教科書に使えるような著作はほとんどないと言ってよく、またそのようなものを、つじつまをつけて編んだとしても、読者がはげしい想像力をかきたてられて、いても立ってもいられないような気持ちにさせられるような魅力を持つて帯びることはないであろう。

ここで私が「概論書」と呼んだのは、たいていはそっけなく、単に『言語』と名づけられた、老練な大家によるいくつかの名著のことである。サビア、ブルームフィールド、イェスベルセン等々。あるいはまた、ゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツと、ソシュールの遺著のよ

うに、『言語学』という語を示したものもある。サビアのはとりわけ、「ことばの研究への手引き」という、じつにひかえめな副題がついていて、この「ことば」と訳されたところも、*Language* ではなくて *speech* となっているところが、じつにひかえめであってしかも挑戦的である。こうしたさりげない題名から、読者は非個人的で教科書的な入門書を想像するかもしれないが、じつはそうではない。その一つ一つが、決して同名の他の著作によって代用させられることはできない。それは、それぞれの著者が、生涯かけて思いめぐらせた思索のあとや、あるいはエキゾチックな、文字で書かれず話されるだけの小さな言語の研究から得た言語観の到達点を示した、じつに個性的で一回きりの作品であることが多いからである。著者たちはすべて普遍的な科学をめざしながら、一回きりと言う意味では詩を書いているのだ。そ

れらはよけいなおしゃべりをつつしみ、ぜい肉をそぎ落とし、きたえられた簡潔な表現に到達したゆるぎなきできわ立っている。そのため読者のうちには、とりつく島のないそっけなさで門前ばらいを食わされたような気持ちを抱く人もいるだろう。

この種の概論のほかに、個性的なおしゃべりで読者を圧倒してしまう、独得の雰囲気をつたえた本がある。私はその代表格として、フリッツ・マウトナーの『言語批判のための手がかり』を掲げたいのだが、今日ではリプリントでしか手に入らないほどのものになっているめずらしい本が、本学の図書館には少なくとも左右田文庫に入っているし、他にも一、二セットあるようだ。ある年私は無謀にも小平のゼミでこれを読んだことがあるが、それにちゃんとつきあった学生もいた。それは、いまは何種類もある「言語学入門」などと銘うった、二番せんの気の抜けた知識のよせ集めでしかない教科書ふうの書物よりも、はるかに精神をゆり動かす力にあふれている。むかしと今とをくらべてみると学問は、感じるものから、単に知るものへと変わってきたように思われる。それは学問が民主主義的大衆文化の一項目にくり込まれた

結果であろう。感じる、という特権が、知るといふ平等に転化したからである。

今おもいかえしてみると、マウトナーを読む気にさせたのは、私の師である亀井孝先生だったが、先生はドイツ書の特に難解なるものを読み解くのを得意とし、学生の私が何か自慢めいた話することがあると、「キミ、マウトナーを読んだみなきやいけないよ」と、くり返し私をくやしがらせたという、つまらぬいきさつによるものだ。動機はつまらぬものであったとしても結果は重大であった。

先生がどの程度マウトナーとつき合われたか、また私のマウトナーが先生のマウトナーとどれだけずれているかどうかはたしかめていないが、マウトナーはおそろしい力で私のなかに入りこんでしまい、どこがどうというふうには指摘できないのに、いつのまにか私を支配しているのに気づく。つまり、これは私にとって知識の書ではなくて思想の書であった。

さて、こうした老人性懐古症のにおいのする昔がたりは早めに切りあげて、では、言語学では、入門書がどうして総決算や遺書になってしまうのか——もっともソシユールは遺書すらも書かなかったので、弟子たちがそれ

を作ってしまったので騒動が起きた——ということにふれねばならない。ここにじつは、言語学という科学の特質があらわれているのだが、それが扱う対象は、ことば——ここでは母語のこと——を話しているすべての人間の意識の中にある知識であって、日常をこえて、外から特別に学ばねばならないような、別あつらえの、フレムトな知識では、原則として、ないからである。この意味において、言語学にとって、知識はまったくじやまものである。自らの意識そのものから導き出せないような知識は、自由自在の言語ではないのである。

この種の、意識のそとから持ってきた、別あつらえの知識の最たるものとして、いまは歴史に関する知識を例にとつて考えてみよう。ことはどんな親からでも学べるが、歴史は特別にももの知りな親とか、学校とかに行かないと学べないから、たとえば年表の中に数字をもつて記載された、できごとの年が、はたしてほんとうにそうだったのかどうか、そこに記されたできごとというものが、ほんとにあったことなのかどうかをたしかめることは、もうふつうの個人の能力をこえているのに、「食べれる」と「食べられる」とどっちが好ましいか、どういふ感じ

方のちがいがあるか等々は、日本語（のある特定の地域的、社会的変種）を母語としているかぎり、それぞれの話し手が、人の意見を聞かなくとも、自分の感じ方ではつきりと、すべての人が言うことができるのである。歴史の知識が、一方的に外から受け入れて信じるべきものであるのに対し、ことばの知識となると、誰でも自力でそれをたしかめ、反論することができる。なぜならそれは、自分のそとではなくて、内にあるからだ。（念のためにつけ加えておくと、ここに言うことばの知識は、文字の知識やモノについての知識とはまったく別物である。辞引きに出ている項目を全部知っているというたぐいの知識は、ことばそのものより、多くはモノにかかわっている。）

このような点からみると、近代言語学とは、こうした外の知識、その代表的なものは歴史的知識であるが、それに依存しないのみか、その介入を許さず、内なる意識となった知識にのみもとづいて、話す人間から、意識となった知識、すなわち言語体系なるものをとり出す方法を確立するためのたまたかいであった。だからこそ、ソシユールの言語学は自らを、共時言語学と名のり、超歴史、

また没歴史のたしばを鮮明にしたのであった。

ところが、こうした思索や方法が、たとえば書物とか大学とかという、学問が通俗の世界と結びあう場に入っていくと、それはたちまち歴史的知識と化し、単に知られるモノとなってしまふ。言語学者は、大ていは、多数の外国語や語源や文字の知識、しかも規範的知識の集積者と見なされて頼りにされるが、しかしそれを求めても報いられず、頼りにならないと知るのにあまり手間はかからない。そこで人はただちに、経済学者がそのまま金もうけの達人ではないという以上に、言語学者がことば使いの達人でないことを知って失望するであろう。

言語学が非歴史的な、閉ざされた体系を扱う学問になつて行く傾向は、シュライヒヤーに見られるように、まずは十九世紀の生物学の影響による自然科学主義によつてきざし、次いでフランス社会学、とりわけデュルケイムの没歴史の社会概念の流用によつて、はつきりとした姿をあらわした。言語をデュルケイムの「社会的事実」という概念を用いて超社会的存在にしたて上げ、やがては社会の外に閉め出すよう導いたこの流れは、ついにチムスキーによつて、言語から社会そのものが消去され、

単体としての生物に、言語の場が与えられることになつた次第は、私の『チオムスキー』で述べたとうりである。

つまり、チオムスキーは、時間的には近代言語学の最も新しい段階において現われた言語理論ではあるが、それは、そこに至るまでの、すべての流派の言語学的思索の成熟の結果であるとか、ましてや集約だというわけではない。言語学は内的発展を演ずるかのようでありながら、その展開はやはり外的に動機づけられている面も決して少なくはない。正統言語学と外的動機づけとの関係の究明は、科学史をいろどる興味しんしんの領域ではあるが、今回はそのような、火中の栗を拾うがごとき危険な作業に乗り出すことは分別をもって避け、ただ、言語学のかなりに正当な流れの中に身を置いている人でも、時には思はずしらず、外的に動機づけられてみずから武装解除してしまふことがあるという例を見ることにとどめておこうと思う。

言語学は「純粹価値の体系」(ソシュール)という、閉じられた世界を取り扱う学問であっても、その純粹体系の維持者である言語学者が身を置いて、かれ自身のことばを用いる場は、決して閉じられてはいない現実であ

ることは言うまでもない。新しく獲得された植民地における調査、研究、言語教育の可能性は、かれに新しい学問的な可能性を与える。ナチズムの用語を用いるならば、学問的な意味でのレーベンスラウムの拡大である。獲得されたものは、かれもまた失おうとしないであろう。このようにして新しく開かれた可能性が、いかに言語の実証的研究をすすめたかは、いまあらためて述べる必要は無からう。

戦争があるたびに、世間の目から見るといわゆる「重箱のすみをつつく」ような言語学が身を乗り出し、戦争の結果がもたらした、言語間の利害について、我を忘れて論争した。ここでは、正統の言語学が扱ってきたのは別の言語のすがたがあらわになるのであった。

戦後まだ間のないアメリカで、いちはやく学問的な活動をくりひろげ、はなやかな一時期をつくり出した人たちの中に、ロマン・ヤコブソン、レヴィ・ストロース、アンドレ・マルチネなど、これら亡命ユダヤ人学者の名を逸することはできない。かれらが参加して、一九四五年に『ワード』という言語学雑誌があらわれたが、その創刊号の巻頭をかざったのは、アルフ・ソンメルフ

エルトの「言語問題と平和」と題する一篇であった。フランス語で書かれたこの巻頭論文は、いまでは考えられないほどの激情をこめて、「日本人どもの古代アメリカ文明の日本起源説」の研究を助成した日本政府を糾弾し、言語と民族との神秘のつながりを強調する、ドイツ語の「精神的武装解除」を訴えていた（くわしいことは、私の『言語の思想』を参照のこと）。かつて言語学者が、体系のそとにおどり出て、これだけ率直にものを言ったことはなかった。

言語的に制裁を受けた、ドイツ語を話すドイツの言語学者の中からは、レオ・ヴァイスゲルバーが『ヨーロッパの言語的未來』（一九五二年の講演）をもって遠慮ぶかくこれにこたえた。このばあい、いわば仏独言語戦争としてあらわれたヨーロッパの言語問題は、じつはその一昔前の、ヨーロッパ政治地図激変期にたたかわされた言語議論の帰結にすぎないとも言える。

いま私は、その時代を話題にするにあたっていずれもフランスの著名な言語学者である、アントワーンヌ・メイエとアルベール・ドーズの二人を念頭に置いている。メイエはスラヴ諸語を中心とした、屈指の印欧語比較言語

学者であって、その著『史的言語学における比較の方法』（みすず書房）は我が国にもよく知られており、またドーズはとりわけその『言語地理学』（大学書林）によって、多くの読者に親しい名前である。この二人は、次の点で私の注意を特に引いたのである。

すなわち、メイエ（一八六六一—一九三六）は、一九一八年に『新生ヨーロッパにおける諸言語』をあらわした後、十年後の一九二八年にはそれを再刊した。ドーズ（一八七七一—一九五五）が『言語的ヨーロッパ』を出したのは、パリがすでにドイツ軍の支配のもとにあったはずの一九四〇年であった。この本は、第二次大戦終結後の一九五三年に再刊された。いずれの著者も、いずれの著書も、戦争とその結果がなければこれらの著書を書きはしなかったし現われもしなかったであろう。

これら二つの著書は、なぜそのいずれもが二度にわたって出版されねばならなかったのだろうか。再刊本は初版本を大幅に書きかえたものであって、むしろ新版と呼ぶべき内容になっている。まず、メイエが『新生ヨーロッパ』と呼んだ一九一八年の段階では、ソビエト連邦はまだ成立しておらず、したがって二十世紀が生んだ、そ

こにおける最も劇的な言語状況の進展は知られていなかった。解体後の旧オーストリア・ハンガリア帝国における、その後の目をみはるような展開もまだ十分進んでいなかった。少くともこの部分の記述に関しては、わずか十年間がまったく実状に合わないものにしてしまったのである。

ドーザについても同じことが言えるであろう。新版においては、アルザスは三たびフランスのものになっていたのである。

これらの現実の変化に対応するには、その変化の事実を単にモザイク的に入れかえるだけではすまない。そのことによって、時には著者自身の判断や予測がしりぞけられたり強調されたりされなければならないからである。たとえば、ドイツ語を母語とするアルザス人が、フランスに帰属したことを喜び、積極的にそれを歓迎したと書くには、それが全体の叙述の中で抵抗なく読者に受け入れられるように工夫しなければならない。それは、部分的な書きなおしだけではすまない、やっかいな作業である。

メイエが二つの版の中で、変らず維持しつづけ、一貫

して表明したのは、「民族自決」によって新しい小国家が誕生するたびに、やはりそれに応ずる小さな言語が次々に国家語、メイエのことばによると「文明語」(langue de civilisation)として登場することへの困惑と反対であった。つまり、メイエのこの著作は、ヨーロッパの諸言語の形勢を述べながら、じつはフランス人特有の文明観を説いた、現代政治思想史のインテグラルな一環をなすものと受けとめられなければならない。それはドイツ的な言語観、文化観とくっきりと対立し、むき出しの敵意の中で抗争しながら、さきほどのソンメルフェルトの発言の背景を形づくって行ったのである。

言語は国家よりも古く、それは国家に比べてより原始的で自然な、民族の概念に対応するものだとするドイツ的な言語観は、言語と民族との相互依存的で不可分の関係をイデオロギーとして定着した。それはたとえば、ロマニストのカール・フォスラーの『言語における精神と文化』(一九二九年)に見られるように、ヴェルサイユ条約が作り出した人為的な国境をこえて、言語が作り出す自然の境界に絶対的な優位をあたえる根拠となる。そ

ここでは文化が政治をしのぐのである。「言語共同体」という用語で示されるこの概念が、いかに大きな射程をもっているか、それを知るには、一方においては、ナチズムが国境外のドイツ語地域の併合にあたってそれが利用され、他方においては、いわゆるマルクス主義の民族理論の形成にあたって最も重要な役割をになつたことを見ればわかるであろう。政治的に相反するこれらの現象の奥底まで下りてゆくと、そこでは共通の地盤につきあたる。マルクス主義における民族理論の真の意味での確立者はスターリンであるが、かれの理論がオーストリア社会民主主義者の諸理論からの熱心な勉強にもとづき、それを引きついだことは、すでに『言語からみた民族と国家』で述べておいた。かれのあの著名な基本的労作が、ウィーン滞在中に書かれたのは決して偶然ではない。

ドイツ・ロマンティックとマルクス主義という、これらすこぶる異つた二つの潮流は、メイエの中でも一つのものと受けとられているふしがある。それは、いずれもが、言語と民族と文化との、その切りはなしがたい結びつきを説いて、ヨーロッパを限りない言語的分裂へ追いやり、いまやヨーロッパ全域にわたる「言語的バルカン

化」の動因をなす、共通のイデオロギーを動因としていると感じられていらいのである。メイエは『新生ヨーロッパ……』の序章で、次のような状況認識を示す。

世界はただ一つの文明を持つ方向にむかっているのに、文明語 (langue de civilisation) の数は増える一方である。

ここにはまず、それぞれの言語に応ずる多様な文化の存在を前提とするゲルマン的な言語文化観に対立して、文明の単一性、普遍性への信念が述べられている。それは「明日の普遍文明」(La civilisation universelle de demain) へと収斂して行くことを予想しているのだ。

普遍文明に対応するのはただ一個の文明語があれば十分であるのに、人はわざわざ国家のために、作ってまでこゝとばを増やし、ヨーロッパの統一を妨げている——メイエの考えかたは、だいたいこんなふうに見えるであろう。

十九世紀から二十世紀にかけて、世界にはおびただしい数の新しい言語が名のりをあげた。我々はその長い一覽表を作ることできるが、比較的なじみ深い大きなものだけをあげてみても、フランマン語、ノルウェー語、フィンランド語、エストニア語、セルボクロアチア語、ブ

ルガリア語等々、これらの中には印刷言語としては、百年の歴史しか持たないものもある。また二十世紀になってやっと文明語としての姿をあらわしたのものもある。リトワニア語、アルバニア語、バスク語等々。ときには少数民族のために、かれらを養っている親国家が新たに言語を造成することさえある。ソ連はカレリア語を作つてそれを共和国言語とし、他方スイスはレト・ロマン語を作つて、一九三八年には、それを憲法の中に、第四の国語として、その地位を明記しさえした。

言語に関して人は原理的に相反する二つの願望を抱く。一つは自分の用いる言語がなるべく広範囲に通用する一般的なものであれかしとする願望であり、いま一つはその言語が他者の言語の借り物ではなくて、固有で比類なく、独自のものであってほしいという願望である。この二つの両立しえない願望が、言語の社会史を形づくつて来た。そのいずれのたしぼをとるかは、多くはその人の母語が置かれた状況と、その人の属する社会階層のちがひによつて異つてくる。

階層という点では、ブルジョワジーは一般に貴族的教養をもたなかつたので、古典語ではなく、自分たちの日

常用している通俗語が国家の言語に採用されることを切望した。国家の言語とは、具体的には学校と軍隊の言語であるが、学校と軍隊を担う、教師や兵士の出身階層について、メイエは興味深い指摘をしている。

学校の言語は、近い将来の国語である。どこでも教師は、教育のあまり無い階級の出身であり、大衆教養ある両親の子であることはめつたに無く、新しい言語の普及の最も熱心な唱道者である。かれは自分の民族の言語しか知らないのである。

近代国家を担う無教養なブルジョワジーはラテン語を知らないだけでなく、支配的な大言語をもよくしないから、かれらははてしない小国家語分裂へと導いて行くことになる。「一般的に言つて、文明語の数はふやすべきでない」と説くメイエにとって、とりわけかれの専門領域であるスラヴ語世界の分裂は耐えがたいことであつた。スラヴ諸語は、印欧語諸族のうちでもよく統一がとれていることをメイエは指摘し、とりわけ文学語としてのロシア語の美しさをたたえ、すべてのスラヴ諸族が文明語としてのロシア語に参与するべきだと説いた。このようなたしぼから当然引き出される帰結として、新しく

誕生したウクライナ語と白ロシア語の運動にはくり返し否定的な評価が述べられる。

小ロシア語〔ウクライナ語〕の話し手は、大ロシア語から孤立することによって、大ロシア語から得られるはずの、自らの利益を失ったのである。

一九一八年の初版本で、ウクライナ語運動について「共通小ロシア語を制定しようとするのは残念なことである」と述べたメイエであったが、すでにその残念な状況が実現してしまつた二八年の新版では、その個所を、「共通小ロシア語の確立は必要でもなく有益でもなかつた」と書きなおした。

白ロシア語に至っては、それは「一群の民間方言ではない」のであつて、かれらはもともと、「大ロシア語をすなおに用いていた」。にわか作りの「まだ完成していない」「白ロシア語で書かれた言語学の専門書」を贈られて、メイエは「呆然自失」してしまつたという。「大ロシア語の集団と一体になつてこそ、小ロシア語の集団も強力な支持となり得るはず」だからである。

おかれてあらわれた多数の新小国家語、新文明語は、メイエの考えかたからすれば、それがかつて従属し、所

属していた大文明語のみじめな写しであり、文明という点からみると本来それが作られねばならぬ必然性はなかつたのである。

新たに生まれる国語 (langues nationales) なるものは、教授、教師、ジャーナリストによって作られる。それらは、それがもつている諸方言の獨創性を發揮させるといふよりは、大文明語の抽象要素をなぞっているにすぎない。……二十世紀初頭ほど多様な書きことばがあつた時代はない。しかし、これほど言語的な創造性の乏しい時代もないのである。これらの言語はみな、単語がちがひ文法形式がちがつても、結局はたがいのなぞりなのである。

これは、事態の核心をすどく突いた指摘であつて、新しく生み出された民族語、国家語に浴せられるおきまりの冷笑であるが、しかし、大文明語の使用から一步も外に出る必要のない人に特徴的な考え方であることも事実である。

ソ連邦はこうした小さな小さななぞり言語を増殖させたかどで、西欧の学者から批判のままとなる。メイエの著作では、ソ連邦は新版に至つてはじめて一章をあてが

われた。

西方の幸福なる言語的統一に対し、ここでは東方の言語的分裂が見られる。……のみならず、ヨーロッパより遠ざかるにつれて、過去との絶縁がますます明瞭となる。西ヨーロッパの諸言語は背後に長い伝統をもつ。……今日のロシアでは、いっさいの文化が唯物的であり、過去を捨てよと教えられる。

メイエは、他のところでは言語は文明の手段にしかすぎないからこそ、大文明がすべての民族のもとで役立つと述べているにもかかわらず、ここではそれとは全く逆に、ソ連邦で行われた、いわゆる言語の革命は、無駄なものでは決してなく、過去との断絶に威力を発揮する力を帯びていることを正しく述べている。

このふしぎなほころびは、読みすすんで行くと、メイエのもう一つの文明観につきあたる。すなわち、ロシア語をはじめとするスラヴ諸語は、「ヨーロッパ文明を蛮族に対して守ることによってこの文明に奉化した。しかし、まさにそのことによって、かれらは西ヨーロッパ人と同じ歩みでこの文明について行けなかったのである。」すなわち、スラヴ諸語は、ヨーロッパの文明語をそれら

しくまもり維持するために、蛮族 (Ces barbares) との最前哨に立って、自らを汚し、そのぎせいにした言語である。ところがソビエト政權は、ロシア語をぎせいにして、蛮族の言語を解放したのである。

文明の中心からはずれ、分立して行く言語への蔑視でも言うべき態度は、メイエの著書の全体をつらぬく基調であって、次の一節にはその決然たる表現を見ることができらる。

言語が多様だからといって、とりたてて独創的な表現力がでるわけではない。ヨーロッパにできた新しい文明語はつまらぬものばかりで、真に文学を富ませるものではない。このような言語を用いる人々は、劣等者でいたくないと思えば、少くとも文明語の一つは身につけなければならない。

メイエにとっては、文明語は権力と何ら関係なく、それ自体の価値にもとづく威信のゆえに、人々によって自由な意志で撰択されるかのようなものである。

言語の拡張がかつて生じ、もしくは今なお生じているばあい、それは征服とか植民によることが多い。

しかし、言語が扱まるためには、それがより高度な文明の道具になっていくことが必要である。人が自分のことばをすてて外国語をとるのは、自分のことばに行えないはたらきをその外国語がなし得るばあいだけである。言語そのものが強制されることは、普通はない。人々が受ける政治的、経済的、知的優位、かれらが取り入れる宗教的、文化的威信は、人々に、自分のではない言語であっても、それをまづ補助的に、次にはそれだけを用いるようにさせるのに十分である……共通語のひろまりはその威信に由来する。勝利するためには、その共通言語が美しいことばだと思われねばならない。

ここでは文明の威信が絶対化されていて、その威信が何によってもたらされるかという、かんじんの問題が避けられている。

メイエのこのたちは再版でやわけられるのではなく、いっそう強調されて、思いきった表現が追加される。たとえば、「ある言語には文明の最良の形態が表示されている」という思いきった一文も新版の中にはじめて現われる。

メイエのような、印欧語比較言語学を代表する言語学者において、我々は意外なことに、言語というそれぞれの単位を相対化する人ではなくて、文明の付属物、文明の機関 (organe) としての言語に、高次から低次への序列を作る思想を見た。それはもちろんヨーロッパの序列に限定したわくの中で語られているのではあるが、それが、「キリスト教共同体の基礎はギリシャ語にある」というところから出発して、「イスラム共同体の基礎はアラビア語に、東アジア共同体の基礎は漢文にある」というふうな印欧語以外の世界にひろげられたとき、メイエはすでに言語学者をはなれて、通俗的な「大文明」論者として立ちあらわれる。

さて、メイエの著書があらわれてからすでに半世紀をこえる事態の推移があった。いったい今なお、ブルトン語について、それは「フランス語に比すれば粗野で不便な道具であるから、およそ常識あるブルターニュ人だつたら、これを用いようなどと思いつくものはいない」と、そのままにくり返して言えるかどうかは問題であろう。

スラヴ諸語において主張された、大ロシア語を盟主とする統一の考えは、当然、自らのロマンス語世界にも適

用されていて、「これほど変化に富む散文言語はなく、これほど正確でニュアンスに富み、柔軟な散文言語はない」と讃えてやまないフランス語のもとに、パトワ（いなかことば）や非「文明語」は消滅せざるを得ないものとして運命づけられた。土地土地のパトワは、「大量生産の工業の前に小規模の手工業が消滅して行くように」退いて行く、それとちょうど同じように、小さな国語も、「あれこれのパトワが死滅して行くように」その運命をまぬかれないと予告している。

メイエがヨーロッパ統一文明の精髓と考えるものは、ラテン語文化を引きついで、統一ロマンス語世界である。「ロマンス諸語相互間の類似性を維持し増大させるため」であれば、時代ばなれしたフランス語の正書法をイタリア語、スペイン語などの正書法に近づけることをも辞さず、それらの「接近」を求めたのである。

私たちの驚きは、生涯を言語研究に捧げたあるいは当時捧げるはずであった、かの著名な比較言語学者が、文明に言語を従属させ、あるいは両者を等号で結び得る人であったことを知って驚きを禁じ得ない。それはそれとして、本稿のはじめにかかげた問題にもどるために、幸

福なロマンス語文明世界からいましばらく離れて、言語学があるかぎり背負い続けねばならない難問に対しなければならぬ。

それはすなわち、言語学は、目的が手段であり、手段が目的であるような、そのような特異な性格を帯びた学問であるが、それを行う言語学者は、特定の言語を母語とし、特定の言語共同体に属しているという事実である。この事実は文明の普遍論によって決して無視したり過小評価したりすることはできない。ある言語学者が、長い研究の伝統をにない、それによって学問が形づくられたところの、威信のある言語によって研究し、発表するとき、その成果は、その威信と、その言語による研究の伝統に依存している。言語学の対象が言語であり、その言語は普遍的な原理を予想しているとしても、それぞれが歴史的な、固有の形成物であることは否定できないのである。しかも、これら具体的な個々の言語は、いくつかの特徴づけによって、性質の似かよったものどうしをまとめ、分類することができるとしても基本的には、同じ言語は一つとしてない。決定的なことは、ある言語に存在するカテゴリーが、別の言語には存在しないというこ

とだ。言語とは、異なるカテゴリーを以て、別々に組み立てられた体系なのだが、それを観察し分析するのも、また、それぞれ異ったカテゴリーに特徴づけられた、具体的な言語によって行われるということだ。

こういうやっかいな作業を背負い込んだ学問を他に見出すことはできない。たとえば歴史学は、人類という単一のカテゴリーが時間という、共通のカテゴリーの中で演ずるふるまいからあらわれる結果を、共通の概念（作業仮説）を用いて扱うであろうが、言語学はより低位のブリミティブなレベルに、いつも立ちもどって考えねばならない。

ことばについての考察が、まだこうした、人間の根源的な不運に気づかれず、ギリシヤ、ラテンの言語から抽出した論理学の用語と、その反映である古典的文法学のワクによってのみ、シナ・ドジンやジャバン・ドジンの言語の研究をして、それですんでいた時代はよかった。その文法は、「ジャバン語には冠詞が欠けている、名詞には単数複数を区別する手段がない、文法的な性の区別が欠けている、文にはしばしば主語が欠けている」云々といったような欠損を指摘する文法記述から脱脚するた

めに、西洋の言語学は数百年を要したのである。

異なるカテゴリーの組立てを持つ言語を、同じく異なるカテゴリーを持つ言語によって分析するという悪循環の外に出るためには、言語学は、言語の外に脱出せねばならなかった。それはあるときには行動主義を媒介とした記述言語学や、相対主義にもとづく構造言語学となつてあらわれた。

このような努力が行われる一方で、——それは、内的体系の相対化に限定されていた——政治と権力にかかわる、個々の言語の威信は微動だにもせず、またそれを交えることはできなかった。むしろ、言語の歴史的な研究は、ますます特定言語の威信をたかめることに奉仕し、具体的な研究はそれを補強しさえした。言語学者は、その学問的客観性に酔ったおぼろな眼のために、現実の事態に対して客観的になることができなかった。だからこそ、かれらは言語の内的体系から一歩外に出ると、あらゆる装備が役立つ、それゆえにこそおどろくべき率直さを以て、世俗の言語的利害をありのままに表明することができたのである。